

## 平成26年度第1回鳥取市政懇話会議事要旨

日 時：平成26年11月25日（火）午後2時～4時

場 所：鳥取市役所本庁舎6階全員協議会室

出席者 【市政懇話会委員（16名）】

河毛寛委員、松下稔彦委員、川上一郎委員、田中仁成委員、村山洋一委員、  
田中道春委員、谷口興治委員、林由紀子委員、小谷文夫委員、山口朝子委員、  
河原正彦委員、景下明美委員、山脇彰子委員、中島諒人委員、松葉幸博委員、  
浅井真由委員

【鳥取市】

深沢義彦市長、羽場恭一副市長、河井登志夫総務部長、田中洋介企画推進部長、  
下田敏美健康・子育て推進局長、竹氏正順経済観光部次長、太田潤一企画調整  
課長、浅井俊彦観光コンベンション推進課長

### 1 開会

### 2 市長あいさつ

今年度第1回、新しい委員の皆様の最初の懇話会ということで、よろしくお願い申し上げます。

国では「まち・ひと・しごと創生本部」を立ち上げ、様々な取り組みを進めようとしている。地方創生は、国より、むしろ地方の方からこうすべきだとか、こういう規制は何とか考えてもう少し変えてほしいとか、そういうことをどんどん提案していく、アイデアを出していく、そのことが必要。

今、人口減少・少子高齢化が全国自治体の共通の課題であり、今まさにそれぞれ自治体がいろいろアイデアを出して検討し、将来を見据えてやっている。

本市は、この11月で合併10年を迎え、この節目の年に将来を見据えて鳥取市をどのようなまちにしていくのか、これを多くの皆さんと一緒に考えていく時期にあると考えている。

本市では、平成18年5月にいち早く人口増加対策本部を設置し、雇用拡大、若者定住に取り組んできた。また、今年9月には、更なる取り組み強化を図るため、賑わいのある「すごい！鳥取市」創生本部というネーミングで新しい本部に改組し、いろんな取り組みを進めていこうとしている。

本市も依然として雇用情勢、経済情勢、非常に厳しい状況だが、そういった中で三洋跡地を買収し、既に2社の企業誘致が実現した。また、今取り組んでいる山手工業団地も今の段階で2社ほど進出をされたいということで、工業団地が足らなくなっているような非常にありがたい状況だが、今こそ皆さんと一緒にこの取り組みをさらに強化して、鳥取はもとよりこの圏域が立ち行き、発展していくような、そういったまちづくりを進めていかなければならないと考えている。

定住自立圏については、東部4町だけでなく新温泉町にも入っていただき、圏域1市5町で取り組んでいる。更に、平成30年4月には中核市に移行するため、準備を進めている。

これからは20万、30万の市が中心となり、その市はもとよりその圏域が立ち行く

ようにしていく、そのことによってこの日本の国が成り立っていくと思っている。鳥取市が果たしていく役割、機能はますます重要になっていくと思っている。そういった視点で皆様からいろんな忌憚のない御意見をいただき、それを限りなく今後の鳥取市政に反映をさせていただきたいと思っている。よろしくお願い申し上げます。

### 3 委員自己紹介

#### 4 会長、副会長の選任（事務局より提案すること及び提案内容に委員会承諾）

- 会長 山口朝子 委員
- 副会長 英 義人 委員

### 5 会長あいさつ

市政懇話会は、毎回市長、副市長、複数の部局長が出席され、我々委員からの意見、提言を直接申し伝え、それを市政に反映していただけるという会。皆さんが忌憚のない活発な発言をしていただきたいと思っている。よろしくお願いします。

### 6 鳥取市政懇話会について

市政懇話会は、市民の市政に対する要望を広く聞き、市政向上、発展を図るために設置している。会では、そのときのテーマに沿い、いろんな角度からの御意見をいただくこととなっている。委員の任期は、2年間、平成26年7月31日から平成28年7月30日までとなっている。自由闊達にいろんな角度から意見交換、議論をしていただき、前向きな御意見、御提案をいただけることを期待している。

### 7 議事

#### 「人口減少問題と地方創生について」

- (1) 事務局説明
- (2) 意見交換

○山口会長 本日、鳥取環境大学の学生で鳥取市若者会議の副会長である浅井委員から、若者の視点での地方創生に対する提案についてお話していただく。

○浅井委員 地方創生を考えたとき、国の政策ではまち・ひと・しごとのつながりであるとか、地方の活性化などが上げられる。私たち若者にできることは何か考え、現在、若者会議では若者交流をテーマに考えている。鳥取市に関わりのある若者の活躍、交流の場をつくる。方針としては、若者をターゲットに鳥取市で活躍したいという意欲のある人物の発掘、交流を通して新たな活躍の場をつくり出していく。ここで大事なのは発掘、交流、活躍の場の3つ。ターゲットを鳥取に関心のある若者とし、特に何かをやりたいという意欲を持つ若者の発掘、彼らの交流の場を設けることで新たな活路を見出せないか。また、若者会議のような活動をもっと広く行うための環境づくりなどができないかということを考えている。

私は鳥取環境大学に通っているが、県外生がとても多い。今年の1年生も8割～9割が県外生。学生同士で若者世代が地方に残らない理由を話し合うが、やはり仕事ができる場所が少ないというのが一番大きいのではないかと。現在、鳥取市でも企業誘致の取り組みや雇用の増大のためにたくさん取り組みがされているので、若者が残りやすい環境が少しずつできてきているのではないかと思う。

また、都市から来た若者を引きとめるため、鳥取の魅力をもっと発信していくべきなのではないか。学生の中には住民票を鳥取市のほうに移動しないでこちらで生活し、大学が終わったら地元に戻ろうという考えの子が多い。まずは住民票を移動してもらうこと、大学に入る前からもう地元に戻ろうという考えを決めつけられないようにする取り組みが必要なのではないか。

最後に、地方にできて都市にできないことは何か。小さなコミュニティーをたくさん形成できる環境にあるのではないか。今、若者会議で地区版の若者会議構想というのを考えている。鳥取市は合併して、青谷や鹿野などたくさんの地域ができていて、その地域ごとに若者会議というものを設置し、若者が行政に対して意見できる環境ができればいいのではないかと考えている。

**○山口会長** 先ほどの市からの資料の中で、あと25年で人口が20%近くも減少するという資料があったり、生産人口の減少とか、本当に今後も危惧されることばかり。増田寛也氏の「地方消滅」、藻谷浩介氏の「里山資本主義」等でいろいろな提案がなされている。ぜひ、目からうろこの、鳥取ならではの人口減の打開策を皆さんから出していただけたら。

**○松葉委員** 20代から40代の成年が減ってきている。この人たちは子育ての年代が中心だと思う。その人たちが安心して子育てができる環境をつくっていくということが一つ大きな問題ではないか。ぜひ保育料を下げてください、安心して子育てができる環境をつくる必要があるのではないか。

企業誘致も必要だが、地場産業を発展させていくことが必要。鳥取市は合併して気高から佐治から用瀬からあるわけだが、林業、農業、漁業という、鳥取市の農林漁業の産業を育成するというのも必要ではないか。

地産地消で鳥取市の保育所や小・中学校の給食にどのくらいの地産地消の利用量が、率があるのか。農業をしてよかった、あるいは林業をしてよかったと思える若者を育てていく必要がある。

**○川上委員** 具体的に誰がどう取り組んでいくかが問題。結局トータルの論で走ってきても、田舎だとか地域といった具体的なところの拠点に戻して、そこが機能的に実質地域として動けるかどうかということまでおいてこない、なかなか実効性の伴うものにならない。議論はよかろうということになるが、時間がたってもなかなか成果が上がってこないというのが繰り返しになっている。

地方と言ったり地域と言ったり地区と言ったり、そのこと自体がどこの誰を指しているのか。住民から見ると、身近に自分のところということになると、結局は地域の概念の原点というのは集落になると思う。ところが集落の実態というのは、リーダーもいなくなり、それぞれの農家も農地を放してしまっている人と拡大していく人と、すごく差がついている。そういう問題を誰がまとめていくかということになると、区長さんも実行組合長さんも回り番という状態になってしまい、受け皿的な機能を果たしていない。

原点は集落だが、コミュニティーを機能的にということになると、効率的に総合的にやらなければいけないので、結局は昔の旧市町村の単位ぐらいが一つの地域ではないか。立派なリーダーがいても、スタッフがおらず、応援団もない。今、農業問題では中間管理事業等でいろいろ受け手と出し手ということで、接点をたどっているが、結局は地域の組織的な体制というか、そういうものができていないのと、それからその地域を担当するのが、例えば農業改良普及員あたりはかなり地域に密着して、地区担当を兼務で持ち、それから農業委員も全部、どこの地域という担当が明確になっている。JAになると多少薄くなってきつつあり、行政になると、鳥取市であれば総合支所があるが、かなり広い範囲になっているのと、さらにそこに今度は人事異動で3年に1回かわってしまうということで、その地域にぴしゃりと担当する方が見えてこない。以前は、公民館があって役場があって農協があって、旧市町村に全部の機能が備わっていたが、今それがばらばらになり、薄れている。結論として、この地域をある程度範囲を設定して、そこに誰がどのようにという形の体制づくりと、応援するチームも明確に担当する範囲に担当者を張りつければ、こういうところから進めていかないと、今までのこの内容はすばらしいことだと思うので、これが実るためにそういう体制づくりを提案したい。

**○谷口委員** 地域の限定を、どこを地域として考えてやっていくかということだが、むらづくり協議会というのは一つのいい単位だと思う。

移住定住について、魅力を発信すべきという話は行政的にはすぐ言うが、問題は発信すべき魅力があるのかということ。行政が一生懸命発信しなくても、魅力さえつくればち

やんと言っけで、むしろ口伝えのほうが信用されて、放っておいてもそれが伝わっていくという話があって、結果的にやはり最後は地域の魅力を上げるしかない。

一般的に地域の課題というのはいいい点と、可能性のある部分と、それから悪い点がある。悪い点を指摘するのが多いが、改善は行政でやっていただく。

民間は、他に無いいところをつくるしかない。その活動に対して市から支援、補助金もいただくが、かなり制約もある。地域ごとに魅力を自分らでつくっていく。鳥取市のいろんなところがそうになっていけばいいと思う。市としても支援をしていただきたい

例えば湯谷温泉にある湯谷荘はどこかの合宿所みたいになっている。利用者の目に立った改革をしていくべきではないか。それはやっぱり地域の魅力につながってくる。

移住定住について、市の移住定住の施策はいろいろあると言われるが、実は県とか、例えばふるさと定住構構みたいな圏域とか、それから国もいろんな施策がある。それぞれの取り組みが一覧表でわかるような資料をつくっていただきたい。その場合、わかりやすい資料をつくっていただければありがたい。

○中島委員 大きく捉えると、市をつくっていくというときに、一つはやはり産業というか、ハードパワー。経済力を生み出していくという部分についての方向性と、もう一つは快適さを上げていく、住み心地を上げていくという部分での方向性が2方向あると思う。従来、どちらかというと産業に力点がある形で産業の育成とか産業の誘致ということで進んできた部分のほうが大きい。これについての重要性は言うまでもなく、もちろん続けていただかなければいけないが、今の鳥取市の現状を考えたとき、やはりもう一つの住み心地をどう上げていくかということについての思い切ったアプローチがあって、今、「すごい！鳥取市」ということでやられているが、鳥取市は住み心地がいいということで幾つかのわかりやすい施策が展開されるということ、鳥取市はこういう点ではほかの市に、ほかの地域に抜きん出て住み心地がいいという言い方ができるような、そういうものが見えてくると、人に向かっても鳥取市はいいですよという話が非常にしやすくなるのではないか。

鳥の劇場として、県の施策で移住定住を促進しようという県の部署と連携し、先日、子育て世代を対象にした移住定住を進めるイベントを東京の秋葉原のスペースで行ってきた。今まで県が移住定住などを進めるときには、基本的には男性に対して、お父さんの仕事を今まで東京で働いている人に、あるいは大阪とかで働いている人に、お父さんの仕事を鳥取にしませんかということをお話することで移住を進めてきた。でも、私たちのイベントの場合、ちょっとやり方を変えて、子育て世代を中心にして、鳥取で子育てをするところというふうがいいですよということを伝えようということを目指した。そのときにやはり一つ柱になるのは教育。鳥取の場合は、例えば森のようちえんというのがある。智頭町は森のようちえんでそれなりの数の流入者があるという状況。そうすると、では同じ路線で考えたときに、鳥取市においてこういう教育が受けられます、もちろん幼児教育も含めて、幼児教育、小・中の公教育という部分で、こういうレベルのこういう質の教育が受けられますという教育の質の問題において、何かおもしろいアプローチがあったらいいのではないか。

その他、例えばNPOなどの活動が鳥取も盛んだと思うが、NPOの活動で重要なところは、要するに自分が社会に能動的に参加しているという感覚を持つことができる。都会に住んでいると、人に流される。多勢に無勢というか、1,000万人以上も人が住んでいるような地域の中で暮らしていると、要するに経済の言いなりになって、自分が生きていてそれなりに金は稼いでいても自分の人生のハンドルを自分が握っているような感じがしないという感覚がある。それに対して、たとえ経済的に稼ぎが少なくなっても、自分の人生を自分で選んで、そして生き生きとした仲間の中で生きている実感を持ちながら生きていくことができる。例えばNPO活動において、このように生き生きと仕事ができる。あるいは、先ほどおっしゃっていたような農業とか林業とか漁業とかも含めて、もちろん儲かるにこしたことはないが、自然の中で時間を自由に使いながら生き生きと暮らすことができる。これは産業の話だけれども、同時に生き方、生き心地の話でもあると思うが、上げていけば幾らでもあると思う。ともかく鳥取に暮らすとこのように充実して生きるこ

とができます、住み心地がいいです、楽しく暮らせますということをアピールしていけるような幾つかの柱を立てて県外にアピールすることができたらいいのではないかと。

鳥取県は立地的に考えても、首都圏とか関西圏に対しても、今、交通事情がよくなってきているとはいえ、やっぱり地理的なビハインドというのは、ディスアドバンテージはかなりある。そういう状況の中で、まずは住み心地のいい状況をつくり、暮らし心地がいいまちだということをつくる中で、産業もそういう状況の中で高付加価値で環境負荷の低い産業、あるいはリサーチ・アンド・ディベロプメントのような産業を誘致していくということで、未来型というか学術都市というか、そういう知的な水準の高い人たちもそこに集まって住めるような、そういう都市を構想していくというあり方も、鳥取県のあり方も含めてだが、鳥取市のあり方として非常に重要になってくるのではないかと。

例えば芸術を見られる環境であるとか、あるいは地域の人たちが芸術に触れることでもっていろんなことに対して挑戦していく、創造的に物事に取り組んでいく、人のまねはしない、どんどんおもしろいことをやってみよう、失敗を恐れない、そういう気風をつくっていく。そういうことが地域の中で循環していくことで、鳥取県というのは、鳥取市というのは非常にみんなが元気で創造的な地域だなということの中で産業も含めて地域が活性化していく、こういうことが起こってくるといいなと常々感じている。

○河毛委員 商工会という形の中で、佐治町、用瀬、青谷、国府、福部もいろいろ入って、仲間が日々頑張っている。残念ながら商工会員はどんどん減っている。それから、一番大きなのは、起業家が少ない。新たに事業を起こそうという若者が非常に少なくなっているというのも悩ましいところ。これは、大型店の法律が改正されてから小さい店がどんどんなくなってきた。ただ、やっとな国も気がついて、小規模基本法という新たな方策を考えて、地域に何とか事業所を残していこうという法案も通ったので、商工会はこれから頑張っていかなければいけない。

地元のあゆ祭りという、河原で2万人からのお客さんと呼んで、地域の商工会員さんにも花火の募金をお願いしながらやっている。その中で、みんなが本当に手弁当で夜遅くまで議論をしながらイベントをやっている。これも一つ大きな地域づくりのものではないか。どんどんどんどん若い人たちが新たなアイデアも出してくれて、毎年それなりの成果を上げているのではないかと。

鳥取と東京の一番大きな違いは、携帯に万歩計がついているので見ると、東京に行くとき必ず1万歩以上歩く。鳥取は下手をしたら1,000歩も歩かないというところも非常に差としては感じるころではあるが、都会にいたら、こういう会にも呼んでいただけないし、こういう意見を言うこともなし、地域づくりに自分たちがかかわることもない。東京のあるサラリーマンは、往復に4時間かかってしまう。お子さんもおられるが、その方が腰をヘルニアされ、もう会社をやめなければいけないという話も出ていた。非常にそういう厳しいところも我々は知るべきではないのかなと。やはり田舎であるから、通勤も30分で十分着くぞと。少々給料が安くても、自然が近いということの中の、都会のメリット、デメリットはあると思いますが、田舎のメリットももっと都市の方には知っていたく努力も必要ではないかと。

全国の商工会の会長の集まりでも、全国が鳥取と同じ悩みを、ここにあるような会議をされている。だから相当な覚悟でやっていかないと差別化は難しい。ただ、基本は人づくりというのが、やっぱり根本ではないのか。赤ちゃんを産むのもそうだが、その中で育てていく中で、地域をいかに好きになってもらうか。これは文化でも教育でもいろいろだと思う。やはりそういうものを一つ一つ丁寧に積み上げていくというのも大事なのではないかと感じている。ただ、捨てたものではない、若いやつ、元気なやつがたくさんいるので、そういうところに人がどんどん入ってもらって、こういう元気なおっさんもおるといところも交流の中でやっていけたら、ああ、こんな人もいるのだということも、あるいは逆に我々も、若い人にはこんな人がいるのだということをもっと知る機会がふえたらいいと思う。

○林委員 鳥取の魅力とかよさというのを私たちが本当によく知っているのだろうかと思

っている。例えば、福祉に関して、都会に比べたら鳥取はいろいろな社会資源が豊富で、例えば保育所とか、あるいは老人ホームにしても、人口に対する設置率から見たら、もう全国的にはかなり上のほうになって、1番とか2番。都市部ではなかなか保育園に入れなくても、鳥取だったら入れる。あるいは老人ホームでも一緒。それから保育料も、全国的に比較したら多分随分安くなっているのではないかな。ただ、鳥取に住んでいる人はそれを当たり前として受けとめているので知らないだけで、実際には都会から見ると、鳥取はすごいということになっていると思うので、その基本的な情報をもう少し、よく、きれいに整理をして、まずは市民の皆さんに知ってもらおうとともに、やっぱり県外の人たちにもPRをしていくことがまず必要なのではないかな。先ほど交通の便も、通勤が、都市から来る人は1時間ぐらいかけて通っていたと言われるが、鳥取だったら30分かかったらみんなが不満を言うような状態なので、本当はすごくいろんな面で恵まれていると思う。それが小さな、人口が少ないからこそよさがあったり、それから自然環境がいいということがあるのだと思うので、そういうことをやっぱりしっかりよさとしてチェックをして、それをまずは自覚するとともに、いろんなところに打ち出していくことが必要なのではないかな。

それから、いろいろな施策を今までも打ってきているし、これからも打つにしても、非常に今後限られた役場の職員の中で、そして予算も限られる中で施策を打っていくことになると、やっぱりメリハリをつけないと、総花的にいろんなことをやっていくのはもう多分無理になると思うので、今後、特に若者定住にターゲットを絞るのであれば、それに関連するものについて、異次元の政策みたいな言葉もあったが、あっと驚くような施策を打っていくことも今後は必要なのかなと思っている。さっき保育料をもう少し安くという話もあったが、すごいと思うような施策を今後は重点的にやっていくことも必要なのではないかな。それをもとに外向けにPRしていくということ。

それから、何もかにも役所ですることはもう無理だと思うので、やっぱり地域が元気になって、地域がやっていくのを行政が後押ししたり、側面的に支援するような形に持っていくことも必要なのではないかなと思うので、今後いろんな施策を打つに当たっても、何でも我も我も自分たちがするのではなく、民間のいろんな知恵を生かしながら地域が元気になるようなことをしていく必要があるのかなと思う。

**○松下委員** 鳥取市の魅力というか、情報発信がやっぱり必要。移住定住で一千何百人も来たような市はなかなかない。そういう実績というのは、県外から入ってこられるわけだから何か住みよさなりあると思う。空き家を利用されたり、お試し定住とか、いろんな取り組みをやっておられて、その実績があるわけだから、そういうものをもっと外に発信するとか、それから子育ての関係でもすごく保育料も安いですし、待機児童は10年前からもうゼロということをやっているような市ですし、それから先ほど地域のことで、佐治とか河原の西郷とか鹿野の取り組みは、全国的にも表彰されたり、非常に自慢ができる取り組みがかなりあるわけで、今、国府のほうも殿ダムを活用してとても元気なわけですから、どんどん各地域がそういうところを勉強されて、いろんなところでそういう力が、パワーが沸き上がってきたり、そういうことに仕向けていくのがまた行政の役目であると思う。

行政におかれても、砂の美術館がなかったら今ごろ観光はどうなっているのかと思うようなこともあるし、そのおかげで海産物等がかなり、休みの日に賀露の辺に行くと物すごい車で、潤っているのが目に見えてわかるような気もする。そういうところをどんどん発信して、市民の皆さんが決して暗くなることはない。日本全国が人口減少していくわけで、今後、団塊の世代が2025年ですか、後期高齢者になった時点、福祉の問題だと、今度はこれを支える介護の職員とか、こういうのをやっぱり養って、我々が育てていく必要もあるし、やることはいっぱいある。決して鳥取というのは捨てたものではないということもみんながやっぱり意識するために情報発信をもっとして、何か何までできるわけではないが、こつこつとやっていたらなと思う。また、この「異次元の」というのはどういうものなのか、この事業提案というのを期待して、また新聞報道を待っていようと思って

いる。

最終的には市のほうでまとめている4項目なり5項目なりの事柄にやっぱりどうしても落ちついていくのではないかと思うが、これからの取り組みに我々も協力し、期待する。

○小谷委員 U I J ターンで十把一からげだが、UとI、Jというのはかなり違いがあるだろうと思う。Uというのは、それなりのいろんな事情があって帰ってくる人だが、I、Jというのは、何らかの鳥取の動機づけなり、何かがあって帰ってきた人だと思う。例えば、旦那はUで帰ったけれども、その奥さんはIだったりする。まずは、これだけの棒グラフのチャートの人数がおられるので、3年もたてばほぼ鳥取の生活になれてくると思う。実際鳥取がどうだったのかというところをぜひトレースをしてみたい。鳥取で暮らしてよかったこと、それから足らないこと。それが次の人口の移動を、都会から人口を促す一つの作戦になると思う。やっぱり実績とか感想を聞かないと、我々、鳥取に住んでいる人がUだ、Iだ、Jだと言っても、余り説得力がない。ぜひそれを聞いていただきたい。

その上で、都会に、嫌になってどこかに帰りたい、どこかに行きたい、地方に行きたいという人がいたとして、彼らには鳥取である必然性はない。どうやって鳥取にそれを呼び込んでいくか。鳥取の魅力をどこにつくっていくか。今は地方でも全国型のチェーンの店とか企業とか、全世界タイプの、最近シャミネにできたような店とか、いっぱいある。おそらく地方に住みたいと思う人はそういうものに飽きている、そういう全国画一なものはもう御免だと思っている人が多いように思う。そういうときに、やっぱり鳥取に引き込むための施策というか、そういうものを考えないといけない。そこで一番パワーを発揮するのは、中小企業であったり零細企業、鳥取の地場の企業だと思う。そういうところのいろんな策を講じて、もう少し人が引き込めるような施策を打っていく必要があるのではないか。大企業の全国チェーンのランチが仮に鳥取にあっても、多分そういうところに魅力は感じないから、最初U I Jした人たちは行くでしょうが、3年、4年たって地方のよさがわかると多分本当の地場のところに行かれるのではないか。そういうところでやっぱり地場の企業がちゃんと力を出せるような施策というか、そういうものがいい。いずれにしても、実際に帰ってきた、移住してきた人の率直な意見というか感想を、ぜひ聞いてみる必要があると思う。

○河原委員 資料1の4ページを見て、ああ、やっぱりこういうことかと思ったが、15歳から19歳で1年間に76人減少している。それから、20歳から24歳までで463人ということで、いずれにしてもこれは大学の効果なのだろう。76人でとどまっているのは、鳥取大学と環境大学で県外から若い人がたくさん入ってきて、全部が住民登録するわけではないけれども、入ってきて、このぐらいで済んでいる。一方、今度は卒業のときにはかなりの数が離れていく。これは登録しているだけでもこれだから、もっと出ていく。ということは、社会増減でこの人口減少を少しでもとめようと思えば、ここを何とかする以外にはない。

それで、今も鳥取市は、環境大学、鳥大で地元の企業に就職されたら少し支度金か何かが出るようなことをたしかやっておられたけれども、それも大事でだが、私が大学に来て感じるのは、実は今、8割ぐらいの子が県外から来る。その子たちがこの環境大学に来て、がっかりして、鳥取は何もないしおもしろくないなと思っていたらかわいそうだなということで、ちょいちょい話を聞く。そうすると、案外鳥取はいいところだという声が素直に返ってくる。

そのいい例がしゃんしゃん祭り、14日にあったが、鳥取環境大学では100人超えるぐらい出る。2連と、それからOBが30人ぐらい来ていたけれども、割合に大阪や近郊からOBが帰ってきたりして、案外鳥取好きというのがいる。ただ、残念ながら、残るよりどころがない。恐らく公務員とか銀行というのは県外の子が入っている。残ってくれている。鳥取県庁もそう。結構県外がいたが、やはり中小企業に残るという選択肢は余りない。ここは中小企業でも結構いい業績を上げていい給料を出すところもあるわけで、知られてないから、何とかここをマッチングする努力を今以上にやっていくのかなと、大学と

市がもっと協力をする。しかも、私ども環境大学は6月にまちなかキャンパスをつくった。先週の土曜日だったか、今度は鳥取大学も若桜街道に近くにつくられた。ぜひ、これから鳥取市は、少しタクト振っていただいて、大学と企業とあわせて地元の企業の魅力を知ってもらい取り組みを、今もやっているが、もっともっとやっていく以外にこの社会増減のほうの解消はないかなと思う。

それから、自然増というか自然増減だが、資料の2のほうで、市の今後の取り組みというのが出ていたが、これは難しい。人口というのは江戸時代まではもうとにかくどれだけ食糧をつくれるかで人口は決まっていたし、その後は生活のライフスタイルなり、子供にどれだけ銭をかけるか、どのぐらいのことをするかにかかっているから、そう簡単に行政が手を出してふえるとは思っていないが、ここの基本方策のところ、みずからの希望に基づきという形容詞がついているが、この辺が施策を非常に曖昧にすることだろうと思う。それぐらい難しい。個人の自由を尊重した形ではないと、このジャンルは行政が口を出さないよというのをここであらわに書いているのだと思うが、この自然増のほうは、余り言わないほうがいいのかと思う。行政として余り言っても何の意味もないなど。これは先ほど言われたが、やはり環境整備。鳥取は暮らすにはいいなという環境整備。それから、子育て支援と書いてあるのは、これはもう十分に、鳥取は負けていないと思う。あとはまちの魅力アップについて若い人たちの意見をいかに本音を聞いて、行政として努力をするところを立案していくか。社会増対策、とりあえず大学と市、これから具体的に相談をして深めていければと思う。

**○景下委員** 本当に自分たちが能動的にかかわろうと思ったら、自分たちの能力であり、自分たちの思いがすぐ直接発揮できる。これは本当に田舎ならではこそで、まちづくりでそれぞれの地域がそれぞれのいろんな特性を持っている中で必ずリーダーがいらっしやあって、その地域ですばらしい活動をされているにもかかわらず、外への発信どころか、その地域の中で、これだけのいいものを持っていていい活動をしているということが伝わっていないというジレンマがある。都会に発信するのではなく、まずそこのリーダーの、地域の方が持っている思いをそこに住んでいらっしやる若い方に伝えることが大事なことで、それと、すごい鳥取って、本当はすごい鳥取市民、鳥取県民なのです。私の団体では50名ばかりの委員がいるが、半分以上は県外から来られている、転勤族の奥様や、U、I、J、全ていらっしやるが、その方々の決め手は人だとおっしゃっていた。ある方は、お父様のホスピスというか終末医療で鳥取に来られて、鳥取の方々と触れ合って、こんなにいい人たちが何でこんなにいらっしやるのだろうと。何でこんなに見返りを求めず、何でこんなに温かく迎えられるのだろうかということで、県外に家がありながらも鳥取にマンションを買われて住まわれている方とか、同じようなケースがあって、すごいぞ、鳥取市民というところをもっと発信できる場がないのかなと日々思っている。

**○山脇委員** 東京から友人たちが鳥取に1泊2日に来ていた。みんな初めて鳥取に来て、1日半ぐらい御一緒した。ラッキョウ畑の中をずっと走ったが、鳥取ってすごい、こんなものがあるなんて知らなかった。富良野のラベンダー畑はよく知っている。あそこはすごくきれい。でも、それ以上に鳥取のラッキョウ畑、もう枯れていて残念だったが、あの広大なラッキョウ畑のあの広さ、こんなのは見たことがない。これが咲いているときを見たかった。鳥取はPRが下手とも言われた。みんな自宅を東京に持っている者ばかりなので、今からこちらに移住するというのはなかなかないと思うが、ただ、こっちに移住するだけではなくて、例えば一時的にでも、別荘ではないが、夏場とか春先から秋口まで半年間ぐらい、上手に農業とコラボレーションして、一時的にこちらに移ってきてもらう。東京では割と近郊の田舎暮らしを時期的になさる方もいらっしやったりするので、皆さんがおっしゃっている大学と企業がコラボするとか、そういうことも非常に大切だと思うが、もっともっと自分たちも口コミの世界でPRすることも必要。自分の言葉で県外の友人たちに知らせる、教えるというの、本当に自信を持って教えられると、すごい鳥取、というのもある。鳥取池田藩の江戸屋敷の黒門が上野の森の美術館の隣にあるが、あれすら鳥取市内の人がどれだけ知っているか。あんな立派な藩の門が、あれが鳥取の門だというふう



になってくる。そういうのもやっぱり興味を持って大学生などに知らせると、またおもしろい文化のつくり方ができるし、県外からの学生の呼び込みというのが、そういうのできるのではないか。

**○田中(仁)委員** もう一丁目一番地の課題というのは、少なくとも鳥取の出身で鳥取に帰りたいと思っても帰れない若い人たちに対して本当に申しわけないなという気持ち。全国で活躍して世界を舞台に活躍したいという若者はどんどん送り出せばいいと思うが、今の数字であらわれているように、一丁目一番地は、端的に言えば大学を卒業された若い世代の方々が鳥取に帰ってきたくても帰ってこれない現状をまずどう解決すべきかということ。まず雇用があって、自分の生活が立ち行くことができるかどうか。この地域で一定の収入があって暮らしていけるかどうか、自立できるかどうかというのがまず一つだと思ってる。ただ、それは企業だけではないのだろうな、あるいは公務員の道だけではないのだろうなとずっと思っていて、最近若い人たちが小さいながらも、例えばNPO法人を始めたり、クリエイティブな仕事を始める。飲食店などもそうだと思うが、従来の形とは違った形で、自分で何かうごめきというか、動こうとしている方が何人かいらっしゃると思う。例えば鳥の劇場で何かやってみたいとか、そういった方々がいればそれでよし。例えば、河原の奥のほうで民芸、陶芸というのでしょうか、そういったものにチャレンジをしてみたいとか、鳥取の自然で、農業でもうけるところまでいなくても、帰ってきたいのだけれども、どこか借りて何かやってみたいという、通常のこれまで僕らが想像していた就職するとか、試験を受けて公務員試験を目指すとか、教員になりたいとか、銀行に行きたいとか、民間企業で働きたいという若者プラス、何か新しい世代の人たちの思いが吸い上げられるような仕組みが何かできないだろうか。

看護学校もできるし、若い人たちが集える可能性というのは鳥取にはまだまだあろうかと思う。例えば、16ページに定住自立圏協定の概要でいろいろ市の課題はある。例えば地域交通で、利便性の高い地域公共交通の模索という、オンデマンド交通とか考えると、そういった事業を若い人たちにしてもらおうようなNPOが立ち上げられないかとか、地域の地産地消にかかわれるような、そういった人材をどこかで発掘して、そういったところに若い人たちが活躍できるような場を提供できないだろうか。地域おこし協力隊という、まちづくりの中で非常に大切な役割を果たしていらっしゃる若者がいるが、ああいったバージョンが市単独で何らかの形でできないだろうかとか、何十人も雇用するというのは行政しかできないとは思いますが、市民と一緒に巻き込むには数人単位ぐらいで若い人たちが地域に根差せるような、そういった仕組みとか制度というのが新しい行政のあり方としてできないだろうかとか。それが行く行く何十人ぐらいになれば一番ありがたいが、これまでと違った次元でというか、今まで行政が踏み込んでこられなかった分野というのはそんなところにあるのではないか。具体的なやり方は、今申し上げたことができるかどうかは別だが、誘致企業といった場面だけではもうないのかなということを感じた。

**○村山委員** 平成20年から鳥取市の主導でまちづくり協議会を設置するというので、2、3年ぐらいで全部協議会ができたと思う。これは公民館が拠点ということで、公民館に協力を得るとのことだが、公民館がなかなか理解が薄い、理解しておられるところもあるが、なかなか拠点になっていないということと、今、町内会の役員になり手がなくて、1年交代の自治会の会長とか町内会長で、そういうことでまちづくりも進んでいないのではないか。それと、合併されたところと旧市内とのまだ画一的な取り組みができていないかなという思いもあり、その辺について自治連でもまちづくり、皆さんが今言われたようなことを基本にした取り組みをしなければいけないと考えている。皆さんにそういう地域づくりの人材の発掘というか育成に力をかけていただければありがたいなど。それが大きなまちづくりの原動力になるのではないかと考えている。

**○田中(道)委員** 町内会の組織率の調査とか、そうすると人口問題も必ずひっついてくる。この関係で、自治会の組織率はアパートが多くて割合が低かったり、高齢化が進んで自治連を脱退したりという状況がある。60～70歳がほとんどなので、元気よく地域づくりを頑張るといっても、若いものはいない。

殿ダムの直下で大きなイベントがあり、3,500名からの人が集まった。鳥取市寄り側はイベントを打っても何とか格好のつくイベントができる。ただ、全部が全部そうならないという実態を踏まえながら、何とか地域全体で元気な地区をつくっていききたい。

この5ページの表は、青谷地域や佐治地域の激減ぶりは、本当にこれは大変な状況だと改めて思っている。

住民登録をしないで帰る学生が多いということを知り、これは私たちが地元で学んだ学生時代とは違う感覚だなと。地元で育って地元の大学に行って地元で就職をして現在に至っているが、当時、地元の大学を出て、もちろん帰っていく同級生もたくさんいたが、今ほど極端なことではなかった。当然、地元の学校を出たら地元で就職をして地元で頑張るのだというのが当たり前だった。卒業したけれども、姿が見えなくなる。そのかわりに新しい学生が入ってくるが、学生の数はプラス・マイナス変わらない。地元に残る学生がいけないというのがもう表で明らかに示している。何とか鳥取の魅力。鳥取にいれば、こんないいところでいつまでも暮らせるのだよという鳥取をつくっていかねばいけないと鳥取人としては思う。

一昨日、鳥取砂丘を歩いた。すぐ後ろで四、五人の若い女の子のグループが、鳥取っていいところだと言っていた。砂丘の美術館に行って、その足で砂丘に入って歩いたようだが、こんないいところがあると知らなかったと。初めてかと言ったら、いや、初めてではないと。ただ、前回来たときには、もう大雪というか真冬で、とても砂丘を歩くことはできなかったと。砂丘を素足で歩くのは初めてだということで、実感としてそういうふうなことを言って、喜々として鳥取を褒めてくれた。鳥取はまだまだいいところがたくさんありますよ。温泉は好きかと言ったら好きだと。鳥取は温泉が非常に豊かで、どこに行っても温泉が出るのですよという話をしたり、いろいろ鳥取のいいところ、セールスできそうなところを本当に今の若い人に植えつけ、教え子もたくさん地元で育てたい。

○山口会長 今日、さまざまな意見が出たが、鳥取の魅力情報を発信する。その魅力も自然であるとか、子育てを初めとする福祉、教育の水準の高さ、また収入が少なくとも豊かに過ごすことができること、人間のよさ等の魅力であるという話が出ていた。あと、若者の起業に対してということで、本当に人口が少ないからこそ専門分野で、ない職種が結構たくさん鳥取にはあるように感じている。そのあたりを発信して、来ていただく一つの方策になるのではないかな。

○下田健康・子育て推進局長 保育料の件について、現行の保育料は、鳥取が合併する際に国の基準の大体9割ぐらいであったものを、未満児が国の基準の7割、3歳以上児は8割ぐらい下げていたが、全国的に保育料の安さを競っても、本来子供の増加につながるかどうかというのはちょっと考えるべきところだが、経済的負担の軽減ということがあり、現在これをさらに軽減する方向で検討をしているところ。

給食の関係で、地産地消という御提案について、保育園、小学校に限らず、鳥取市では地元の食材を可能な限り使っていくような方策で進めているところ。

○河井総務部長 学校給食の地産地消について、当然、この地産地消の率を上げるというのは、大きな課題として取り組んでいる。献立については、合併新市域のほうは、それぞれの町ごとに献立をつくり、地産地消の率を上げる。そして、旧鳥取市域においては、約1万食ぐらいになるわけだが、それもその地域として率を上げるということで、旧鳥取市で申しあげると、60%を超えているというところ。当然、新市域のほうは、もっとそれよりも児童生徒数も少ないので、食材の確保がやりやすいという部分があり、率は高くなっているというのが現在の状況。

○竹氏経済観光部次長 経済観光部の観点から申しあげると、地産地消の前に、企業誘致も重要だけれども地場産業の活性化も大切だとおっしゃっていただいた。まさしくそのとおりで、我々は企業誘致という言葉もそうだが、企業立地というふうに使分けしており、県外からの企業の進出はもちろんだが、県内企業の増設といったことを積極的に行っている。地場産業の活性化という中では、財政的な支援制度も設けている。

地産地消の部分では、主に小・中学校の給食というのがわかりやすい取り組みだが、

今、総務部長が申し上げたとおり、やっぱり100%を目指したいが、なかなか食材の量でとか、あるいは中身によって、なかなか年中、市産のものを使うことができにくいという状況で、今ちょっと上がって70%ぐらい導入をしている。もっともっと率が上がるように、地産の農家、食材をつくってくれる農家にも支援をやっているが、引き続き数字が上がるような取り組みを進めてまいりたい。

**○深澤市長** 長時間にわたり、さまざまな視点から多岐にわたり、非常に示唆に富むお話をいただいた。

鳥取の魅力、鳥取の資源をいま一度我々が共通理解をして、そのよさを認識して広く内外に情報発信をしていくことが今まさに必要ではないか。また、そのためには人が必要。人の育成といったこともこれから大いに取り組んでいかなければならない。また、こういった時代だからこそ価値観が多様化し、先行きが少し見えにくいということで、少し違った視点を持って、また違った考え方でいろいろ物事を考えてみる、発想を持ってみる、こういったことも必要ではないか。また、人づくり、それから、やはり住み心地、暮らし心地が大切だということで、今まで、経済効率を優先して考えてきた、そういった時代ではもうなくなっているということで、芸術活動、創作活動、そういったことが地域で循環をしていく、そういったことがこの鳥取でできたらいいなと思っている。そういったものが社会の基本的なインフラであるという、そういった町になれば大変すばらしいなと私も改めて今思った。

鳥取はポテンシャル、潜在力、非常に高い町であると常々私は勝手に思っているが、やはり前を向いて将来を考えていく。鳥取はまだまだ捨てたものではないということで、地方創生はこの鳥取から発信をしていけるのではないかなと思っている。そういった可能性をみんな信じて、もっともっと魅力あるまちづくりを、力を合わせてやっていけるのではないかなと、きょう皆さんからパワーをいただいたように思っている。

長時間にわたりまして熱心に御議論いただきましたことに感謝申し上げます。

**○山口会長** それでは、時間となりましたので、第1回市政懇話会をこれにて終了します。ありがとうございました。